

シャッターの向こうに見えた笑顔

一枚の写真がつなぐ心と暮らし

| | |
|-----------|------------------|
| 法人名 | 医療法人豊和会 |
| 事業所名 | グループホームプルミエールさなげ |
| サービス種別 | 認知症対応型共同生活介護 |
| 発表者 職種・氏名 | 介護支援専門員・出町淳子 |

一枚の写真が導いた「その人らしい暮らし」の再生

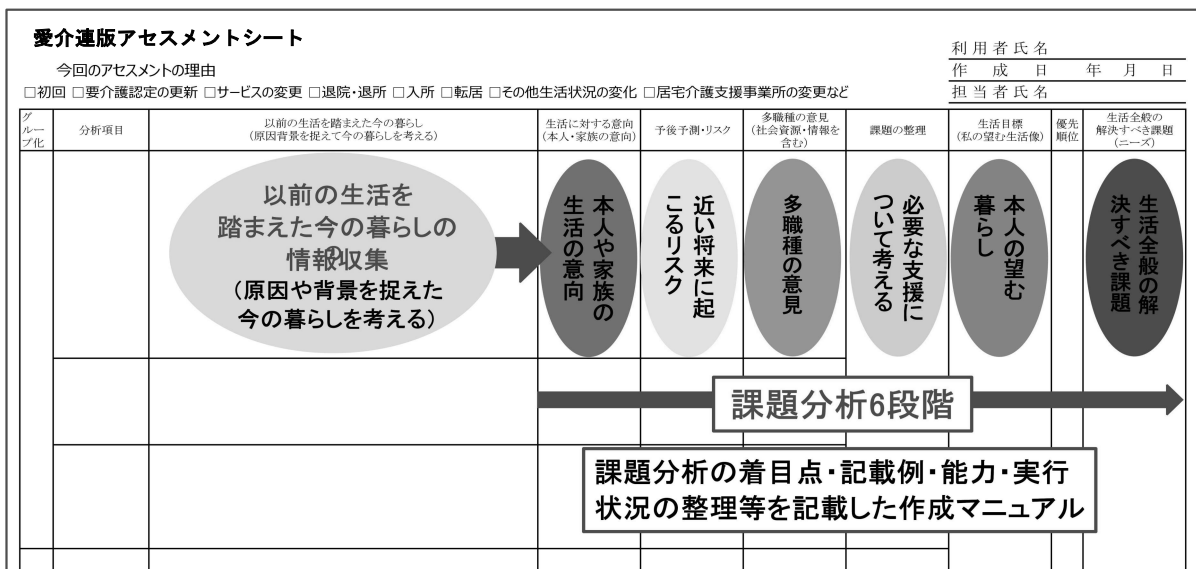
私たちのグループホームでは、入居者様 18 名それぞれの人生に寄り添い、「その人らしい暮らし」の実現に取り組んでいます。看護師と介護職員 14 名が連携し、認知症に対応した支援を行っている中、個別援助計画は、介護支援専門員 1 名と認知症介護実践者研修修了者 3 名が分担して立案し、専門性を補い合いながら、作成しています。

限られた体制のなかで、質の高いチームケアを育むには、職員間の情報共有と意思統一が不可欠です。私たちはその鍵として、3 つの連携ツールを独自に整備・導入しました。今回はそれらの「小さな工夫」が、入居者 A 様の支援にどのような「大きな成果」をもたらしたのか、事例を交えてご紹介します。

情報共有を支える 3 つのツール

1. アセスメントシート理解促進のマニュアル整備

計画立案・作成のための課題分析 6 段階やその着眼点、記載例を盛り込んだマニュアルを作成しました。シートの指標ごとの分析項目に対応する記述欄を設け、能力・実行状況を整理できる構成にすることで、「情報収集のしやすさ」や「業務負担の軽減」に繋がっています。



2. カンファレンスシートの見直しと定着化

令和元年より試行を重ね、5年かけて独自に作成しました。計画の内容（課題の整理・意向・ニーズ・目標）・支援のポイントシート上部に、検討内容や進捗を下部に明記することで、カンファレンスの「話し合いの場」としての有効性が向上しました。このシートは、入居者様ごとに作成します。職員からは「計画の理解が深まった」「思考過程が共有できる」といった声が聞かれています。

カンファレンスは、週1回行い、必要に応じて、計画の見直しや支援ポイントの変更につなげています。カンファレンスに参加できなかった職員も検討結果を必ず確認しています。

3. 24時間情報共有シートの整備による可視化の促進

昼間・夜間に分けて、1時間ごと24時間の支援のポイントが一目で分かるよう1ユニット9名分を1枚に記載します。

昼間は、曜日ごとの日課の違いにも対応し、月曜日～日曜日の7枚作成します。

上段に短期目標を記載し、どんな目標に向かって支援していくかを明確にして、時間帯別にカンファレンスで検討した支援ポイントを記載します。9人分が時間毎一目で把握できます。「新人職員にとって有効」「支援の統一や安心感につながる」との評価が定着しています。

24時間情報共有シート (抜粋)

事例紹介：写真がつかないだ支援の力

A様(90歳)は、登山と花の写真撮影を長年楽しみながら、自動車関連のお仕事に従事されてきました。入居時には複数のアルバムをご持参され、ご自身の世界への誇りが感じられました。しかし、脳梗塞の後遺症により軽度の失語・失行が残り、無表情や意欲低下が続いていました。

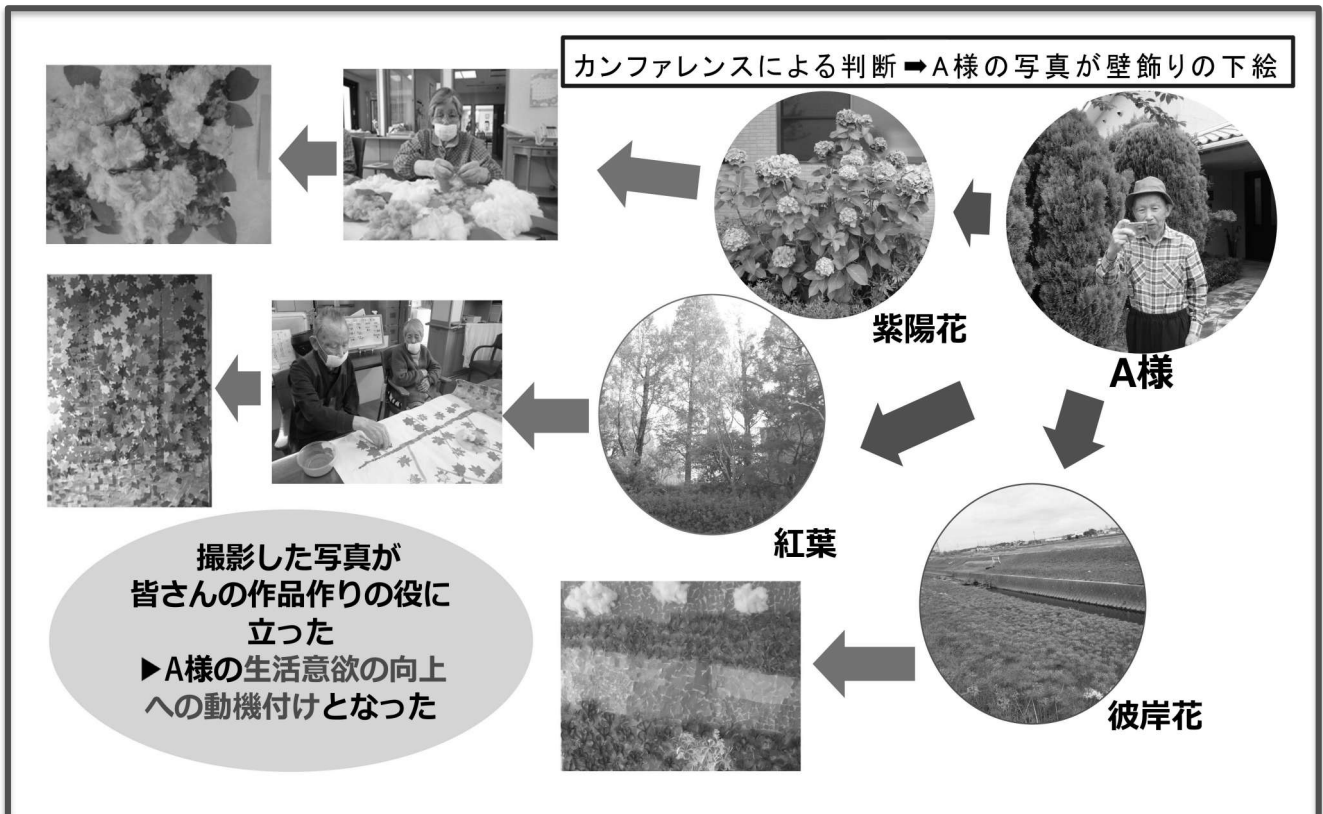
そんな中、ある日、職員が散歩中に「昔はいろんな山へ行ったんですよね？」と声をかけると、「うん。また行って写真が撮りたいな」と、ふと微笑まれました。この何気ない一言をきっかけに、チームは支援の可能性を探るケアカンファレンスを開催。A様の趣味や能力、発言の背景をふまえ、「写真撮影の意欲と力は残っている」と判断されました。

そこで、個別援助計画の見直しを実施。アセスメントマニュアルを活用して、目標やニーズを再整理し、計画に「写真撮影の機会づくりと作品活用」を明記しました。さらに、24時間シートにも具体的な支援内容を反映。午前中の散歩時間帯に「カメラを持って散歩へ促す」「撮影後は写真の話題を共有する」といった支援ポイントを盛り込み、職員全員が統一的なアプローチで支援できる体制を整えました。

「今日は天気がいいですね。カメラを持ってお散歩しませんか？」という自然な促しにより、A様は再びカメラを手取るようになり、撮影された作品は壁飾りの素材として活用。自らの作品が暮らしに息づくことで、自尊心や表情の変化につながりました。3か月後には壁飾りづくりにも参加され、食事量や生活への意欲が向上し、「撮った写真をアルバムにして家族に見せたい」と、新たな目標も生まれています。

最近では季節のドライブにもカメラを携え、風景や花、入居者様・職員の笑顔を撮影されています。そのレンズの先には、「また誰かに見せたい」「撮り続けたい」という、確かな生きる力が宿っていました。

この一連の支援は、**気づき → カンファレンスによる判断 → 計画の変更 → 24時間シートでの統一 → 実践・変化の共有**という流れがチームで確実に機能した成果です。個々の発言をケアの出発点とし、それを「全員で活かすしくみ」があったからこそ、A様の笑顔は再び写真撮る中に輝いたのです。



成果と職員の声

職員へのアンケートでは、以下のような変化が報告されました。

| ツール | 職員の声 |
|-------------|--------------------------|
| アセスメントマニュアル | 「ニーズが導きやすくなった」「負担が軽減」 |
| カンファレンスシート | 「計画の見直しがしやすい」「思考の共有ができる」 |
| 24時間情報共有シート | 「支援の統一ができる」「新人育成に役立つ」 |

一方で、「シート作成の手間」や「慣れると活用しなくなる」といった課題も浮かびました。

ケアの本質：仕組みとまなざしの融合

連携ツールは、単なる業務支援にとどまらず、「支援の自信」や「職員間の一体感」を育む役割を果たしました。情報共有の仕組みと対話の場が整うことで、入居者様一人ひとりの小さなつぶやきがケアの出発点となり、大きな変化につながる土壌が生まれています。特に、A様の「また撮りたい」という言葉を支援に繋げられたことは、ケアの本質を象徴する瞬間でした。この一言に職員が心を動かされたように、支援とは、生活意欲への動機づけを目的の一つとし、「人へのまなざし」と「それを共有する力」によって、その人らしさを支える実践です。

まとめ

介護支援専門員として、限られた体制の中でチームケアを育てるための工夫を重ねてきました。連携ツールの活用と定期的なカンファレンスの実施は、計画の質の向上と情報の共有だけでなく、職員の育成・安心・意欲にもつながっています。

今後も、誰もが「その人らしさ」に気づき、寄り添いながら支え合える文化と仕組みを育てていきたい。A様の笑顔がシャッターの先に再び写ったとき、私たちの支援の意味が最も感じられるのだと実感しています。

A様最新の笑顔と作品
です♡

